

アトリエ 琉游舎 だより 119号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/ 2021年12月1日発行
 琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

臘月 季冬 窮陰 極月

(ろうげつ) (きとう) (きゅういん) (ごくげつ)

- どれも12月の異名です。有名な12月の異名は師走ですが、ここに上げた12月はどれも年の終り、寒さも窮まった感がありあります。「師走」という呼び名が穏やかに聞こえてきます。
- 臘月の「臘」はつなぎ合わせるという意味で新年と旧年の境目となる12月の異名となりました。季冬の「季」は四季の終り、晩冬のことです。新暦では1月は冬の盛りですが、旧暦だと1月は新春。「春」です。窮陰も極月も気持ちは陰に窮まり冬も極まった感が文字に託されているようですが、裏返せば必ず春が来るという確信に裏打ちされた言葉なのでしょう。
- その他に12月の異名として「春待月」や「梅初月」もあります。こちらは春を待ち望み梅の花が初めて咲いてそろそろ春だなと、期待感が言葉となった明るい気持ちになる12月です。
- 師走の由来は「師が走り回るほど忙しい12月」という事です。この「師」は先生のことではなく、僧侶のことです。12月は1年の悔いを改める懺悔の法要が寺や家庭のあちこちで営まれていたようで、僧侶は引っ張りだこだったのです。また12月は借金の清算の月でもありました。売掛金や借金の回収に走り回る取り立て屋から逃げ回って大晦日を過ごす話が落語にもみられます。12月は罪と借金の清算の月。江戸時代は元旦にさえなれば前年の借金は一時棚上げで、お互いに新年を祝って笑い合っていたと聞きますが、本当だったのでしょうか？
- それが日本人の師走のあり方なら、借金財政の清算も嘘の答弁の懺悔もしない先生たちが補正予算で画策しているバラマキは、来年も笑って迎えられるようにとこの国の大家が店子に振る舞うクリスマスプレゼントかお年玉なのでしょう。ただ、借金には取り立て屋、嘘には因果応報がつきものです。怖い回収屋と舌を抜かれる恐怖に怯える窮陰を過ごした後に、喜びの新春はあるのでしょうか。

12・1月スケジュール

12月			1月			
月	火	水	木	金	土	日
6	7	8	9 映画会 13時半	10	11	12 写経会 13時半
13	14 読書会 13時半	15	16 映画会 お休み	17	18	19
20	21	22	23 映画会 13時半	24	25	26
27	28 読書会 お休み	29	30 映画会 お休み	31	1月1日 新年祝祷会 10時半	2
3	4	5	6 映画会 13時半	7	8	9 写経会 13時半

写経会
 12月5日(日)
 1月9日(日)
 13時半
 般若心経・自我偈・
 観音偈・方便品の手
 本を用意しています。

読書会
 12月14日(火)
 13時半
 「立正安国論」最終回
 来年は「阿弥陀経」が
 テキストです。浄土の
 姿が描かれた経です

12月2・16・30(木)
映画会
お休みします

先日家から車で45分の塩原の温泉に泊ってきました。小旅行とも言えないほどの近場のプチ贅沢は栃木県民が県内の宿泊施設に泊まった場合に割引となる「GO TOトラベル」の栃木県版の利用です。温泉はいつも山登りとセットで疲れを回復するためという大義名分があったのですが、今回の場合は割引という餌に釣られての温泉行。一寸だけ得した気分の目的も名分もない不要不急の支出もたまにはいいものですね。

ここ最近コロナ禍で止まっていた活動が一気に動き出した感があります。車を運転していると年度末でもないのに必ず一箇所は道路工事の現場に遭遇して車を止められます。塩原の旅館の駐車場は一杯。久しぶりに夕食にと出かけたお店も予約客で一杯。12月に入るとクリスマス商戦でショッピングモールは人で溢れかえることでしょう。マスコミはこれをリベンジ消費と名づけて人々に散財を勧めています。私たちが何に「復讐」してお金を「消費」しているのでしょうか。自粛で使いたくても使う機会がなかった反動の消費であればアクション消費（反動消費）だと思えるのですが、ニュースでしきりに「リベンジ消費」と言われると、復讐する敵もないのにお金をあちこちで散財しなければならない気分させられてしまうようです。

そろそろ新型コロナウイルスに辛抱を強いられた日常も2年近くとなります。この間の、人それぞれの不自由や不要不急の有り様を一様に括することはできないでしょう。不自由な社会と総括してしまうとそれはそれで納得してしまいがちですが、その不自由は各々事情が違うはず。政府やマスコミが総括する不自由や不要を自分の不自由や不要と思わずに、何が私の不自由であったのかを考えることで、私のコロナ禍の正体が現れてくるはず。経済的に困窮された方や、仕事に不便を強いられた方、コロナに冒された方の困難はお察しいたしますが、あえて私の観た私にとってのコロナ禍の正体を申し上げれば、それもありのままの日常の毎日であるということです。行いは停滞するどころか、ますます盛んな日々を過ごし、何一つ我慢の必要がありません。コロナ前にも増して自由自在に遊行する豊かで楽しく安らかな日々です。旅行に行けない宴会を開けない人と会えない、それが我慢の対象ではないと分かったと打ち合わせやコミュニケーションは忍耐と工夫によって代替が可能となり、多くの時間を取り戻すことが出来るようになったのです。不自由や不要不急と自ら思い込み思い込まされていたものは、我慢すれば不自由、忍耐すれば自由だったのです。

お釈迦様の教えに従えば「忍耐」と「我慢」は全く正反対の言葉です。「忍耐」はやすらぎの処（彼岸）へ辿り着くための六つの実践徳目（六波羅蜜）「布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧」のひとつ「忍辱」と同じ言葉です。人間、生きている限り苦境にぶつかり理不尽な思いに駆られることは当たり前ですが、それをありのままのこと、縁起の法によって無常のものと思えばその瞬間を耐え忍びまた前に向かって歩み続けることが出来ます。忍耐は明日へと向かう創造と再生へのエネルギーです。一方ありのままの今を受け入れることが出来ずに、不安にかられ我慢することは過ぎ去った「我」への執着です。かつての自分にとって望ましかった「過去」に執着すれば、そうでない「今」に対して抵抗するか我慢するしかありません。その「今」が我慢や抵抗の対象でしかないならば、いつまでたっても「苦」から解放されることはないでしょう。それは「執着」の成れの果てだからです。「我慢」は自己主張を押えた望ましい態度とみられ「忍耐」と同じような意味合いと誤解を受けますが、それは全くの過ちです。「慢」は心のおごり、煩惱のひとつに数えられるもので「我慢」は「我が心の傲り」です。我をよりどころとして心が高慢であること。自らを高しとし、自分自身に固執して他人をあなどること。我慢は「今」をありのままに観ようとせず「過去」の我に執着する「我執」ですから、どうやっても「苦」から逃れることが出来ないのです。忍耐は、たとえ今この瞬間を不自由と感じたとしても一瞬にしてそれを過去のものとし、お釈迦様の教えと共に「ありのままの今」を確実に歩ませてくれるのです。「忍耐」が彼岸への六つの実践徳目のひとつであることの訳がここにあります。一方「我慢」は「過去」への執着と「今」への不安や不満足の内なるものです。我慢の果てに我執の過去を再現したとしても、それは今への復讐であり未来に「苦」を再生産するに過ぎないのです。

コロナ禍の今、私の日々を「豊かに楽しく心安らかに過ごし、何も我慢をすることはありません」と語ったならば、現在つらく不安な生活を強いられている人や病で苦しんでいる人がいるのに、何と呑気で傲慢な言いぐさかと非難を受けるかもしれません。しかしそう言われる方自身、果たしてコロナ禍以前の過去は自由で幸福な日々だったのでしょうか。恐らく過去においても不自由で不幸な日々我慢を強いられていたに違いありません。お釈迦様の教えは「不自由と自由は不二」「幸も不幸も不二」なのです。「我慢」には不自由や不幸の相が、「忍耐」には自由と幸福の相が現われます。コロナ禍の今も常と変わらず、ありのままに観てありのままに受け入れ、忍耐を友として自由自在に遊行する毎日が安らぎの日々なのです。

日本人は昔から仇討ちや仕返しなどの復讐譚が大好きですから、リベンジ消費の宣伝文句は経済や社会生活を傷つけたコロナウイルスへ、刃に変えてお金で復讐するのだと言う日本人好みのかけ声かもしれません。ところが最近の若者の間では「revenge」は「リベンジ」へと意味の転化があったようです。前者は復讐や恨みという陰惨な印象ですが、カタカナになると再チャレンジという前向きな意味になるとのこと。言葉の「陰」の部分切り離して意味を転じる例は、中国語の「我慢＝煩惱」から日本語の「ガマン＝美德」への転化と同じです。「revenge」が「リベンジ」へと意味が反転してしまう現象は「陰」より「陽」を好む、あるいは「陰」の部分から目をそむけたがる現代日本人の意識の表れかもしれません。